HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	前田本日本書紀院政期點 (研究篇)
Author(s)	石塚, 晴通
Citation	北海道大學文學部紀要, 26(2), 277-343
Issue Date	1978-03-30
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/33426
Type	bulletin (article)
File Information	26(2)_P277-343.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

前田本日本書紀院政期點（研究篇）

石塚晴通

前田本日本書紀院政期點（研究篇）

石塚晴通

一、はじめに

日本書紀古訓は、從來色々の分野の研究者より關心を有たれ重要視されながら、其の性格は必ずしも解明されてゐない。そのため引用に際しても、何本の何時代の訓であるかを明記せず等し並みに日本書紀古訓とされたり、流布本である寛文九年版『新訂增補國史大系・日本書紀』等の底本）訓で濟せる傾向があり、而も一種の上代資料として扱はれることも少くなかつた。しかし諸本の閒では訓の系統が異り、加點の時代も異り、寛文九年版訓は何世紀にも亙る加點の錯綜したものであつて而も或る系統の癖を有つた訓である。日本書紀古訓の系統は、今のところ明かにされてゐるとは言ひ難いが、平安時代加點諸本の中でも前田本訓・圖書寮本訓と岩崎本訓との系統は異るやうであり、また鎌倉時代中期以降の卜部家を中心とする神道關係者の訓は研究の成果としての集成的・復古的・擬古的傾向をも有ち而も當時の語形語法をも交へてをり、平安時代加點諸本の訓とは性格の異るものである。そして寛文九年版訓は卜部系諸本の訓の色濃く流れ込んだものであり、何世紀にも亙る加點の錯綜したものである。從つて何本の何時代の訓であ

るかを明記せず、また斷り書き拔きで寛文九年版訓を用ゐて、等し並みに日本書紀古訓として扱つたり引用したりすることには難が有る。日本書紀古訓は日本書紀本文に加點された訓點資料と見做すべきものであり、その立場より究明することが必要である。本稿は右の立場より日本書紀古訓の系統と年代性とを究明する一連の作業の一として、前田本日本書紀院政期點を取上げるものである。

前田本と圖書寮本とが日本書紀本文の系統上同じ系統に屬し、訓點も極めて近い間柄にあることは夙に知られてゐる。卷第十四雄畧紀と卷第十七繼體紀との二卷が共に存するので兩本の訓點を比較することが可能であり、「圖書寮本の訓が前田家本を全くそのまゝに受繼いだものである」（阪倉篤義『書紀古訓のふるさ――ホルモカ私考――』・『藝林』二の二・昭和二十六年四月）とする指摘もなされてゐる。筆者は、兩本の訓點を比較して其の一致の度合の強いことを述べたこともある（『日本書紀平安時代加點諸本の訓法』第二十五回訓點語學會・昭和四十六年十一月）が、前田本のみに存する訓點には一定の傾向が存し片假名字體の問題點も關聯して前田本の加點年代を下げ兩本の先後關係を考へ直す必要のあることを指摘した（『前田本日本書紀院政期點につきて』第三十六回訓點語學會・昭和五十二年五月）。本稿では、兩本の訓點を徹底比較して異同の全例を示し、兩本の訓點の相互關係を究明することを主目的として、音韻・文法・語彙等兩本の訓點に共通の問題については圖書寮本永治二年點全文を示した後に他稿を期すことにする。

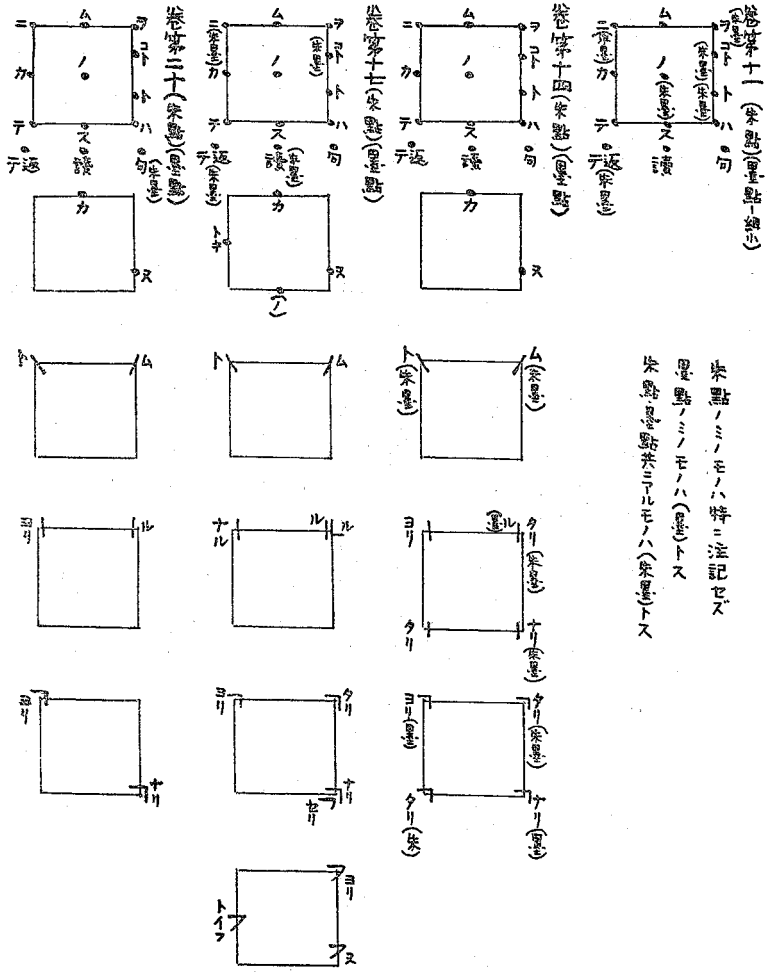
二、加點樣式

前田本日本書紀四卷の本文の書寫は十一世紀中期頃と見られるが、訓點は本文の書寫より後れ院政期も大分下る時期に加點されたものと見られる。假名に墨の濃淡（希に朱）、ヲコト點に朱墨あり、加點は數度に亙り成されたものの如くであるが、近接する時期のものと見られ、一卷全體を一の訓點資料として見做し得るものである。形式的な移點作業に基くと考へられる誤點（左訓を次行の右訓とする等）やヲコト點のズレが多いこと等により、これが移點本であることは明かである。假名字體及びヲコト點圖を示すと、別圖の通りである（挿圖參照）。

先づ假名字體については、大體に於て元の訓點の字體を加點（移點）當時の字體に改めて移點してゐるかと見られるが、中には元の古い字體を其のまま寫したものも有る。例へば「ス」の假名字體の第二形「　」は、十七108（卷第十七108行目ノ意、以下同）「ミウス（薨）」の箇所のみに見られるが、元の字體を殘したものと考へられる。また、十七60「オヒネ（大兄）」の「ネ」は「　」で一見「ニ」の如くであるが、元の字體を殘したものと見做し得る（十七47「キニ（ミ）（主）」の「ニ（ミ）」も「　」で古い字體の名殘かとも見られるが、この方は「ミ」と「ニ」との單純な誤に基くものと見るべきである）。元の古い字體を理解せず、字形の似通ふ別の假名として誤點してゐる例は少くない。十四137「アサメマツリタマフ（止）」の「ア」は後に誤點に氣付いて右傍に「イ」と訂正してゐるが、「イ」の字體が元の本で「　」であつたことを示してゐる。同樣に十四282「モコトカ（渡畧）」の例は、元の字體が「よ」であつたことを示してゐる。また、二十183「ネヤ（疫疾）」の「ネ」は「　」で誤點であるが、これは元ア行の「エ」であり「ゑ」の字體であつたことを示してゐる。これ等は元の本の年代性を考へる上で甚だ興味深い史料である

㋐ ア	㋕ カカ	㋚ サセ	㋟ タタ	㋠ ナナ	㋡ ハハ	㋢ ママ	㋤ ヤヤ	㋥ ララ	㋦ ワワ
㋑ イイ	㋖ キキ	㋛ シシ	㋣ チチ	㋧ ニニ	㋣ ヒヒ	㋨ ミミ		㋩ リリ	㋧ ヰヰ
㋒ ウウ	㋗ クク	㋜ スス	㋤ ツツ	㋨ ヌヌ	㋥ フフ	㋩ ムム	㋪ ユユ	㋪ ルル	
㋓ エエ	㋘ ケケ	㋝ セセ	㋥ テテ	㋩ ネネ	㋦ ヘヘ	㋪ メメ		㋫ レレ	㋩ ヱヱ
㋔ オオ	㋙ ココ	㋞ ソソ	㋦ トト	㋪ ノノ	㋧ ホホ	㋫ モモ	㋬ ヨヨ	㋬ ロロ	㋫ ヲヲ
									㋭ レレ

挿圖一　前田本日本書紀院政期點假名字體表



挿圖二　前田本日本書紀院政期點ヲコト點圖

（但、前田本が依つた本の段階で既にこれ等の誤がなされてゐた可能性もある）。これ等の古い字體を傳へてゐる一方では、「ウ」の第一字形の終畫が長く內側に入り、「シ」の終畫が水平よりは上り、「ツ」の第一字形の終畫が長く內側に入り、「ヲ」の初二畫が長く水平であるといふ片假名字體史上新しい要素を有つ。これらの新しい特徵が一部の訓點にのみ見られるものではなく全卷に亙つて見られることよりすれば、前田本の移點年代は院政期もかなり下つたものと考へる必要が有る。

次にヲコト點圖については、朱點も墨點も見られるが、年代的には異るものではなく、朱點が主で墨點で補つたり區別したりしてゐる。所謂る博士家點に屬し、卷第十一は星點のみであるが、外の三卷は線點・鉤點を有ち、似通ふ點圖を構成してゐる。卷第十一の星點には墨點も見られ、細小なことが特徵である。卷第十一の點圖には古い要素は見られないが、外の三卷には星點にも古い要素が有る。第二壺の星點「カ」・「トキ」・「ヌ」は少數ながらも存し、古い點圖の位置のまま改めずに移點したものと見られる。卷第十七に存在が疑はれる第二壺の「ノ」は、讀點と認定されたものかと見られるが（145妾、171南、177吾、230其、等）、元の本で第一壺の星點「ノ」がズレてゐたものか或いは古い點圖の名殘か不明である（圖書寮本にも同樣になつてゐる）。「ヌ」が存することを不審とする向きも有るかと思はれるが、圖書寮本にも同樣に存し、前田本卷第十七のみであるが同じ位置に鉤點の「ヌ」も見られるので、句點のズレ等ではなく「ヌ」と認定すべきものと考へられる（因みに、岩崎本平安中期末點にも、壺の左下線點「ヌ」が見られる）。念のため、（本文篇で）「ヌ」と認定した全六例を此處に掲げておく。

十四256　蔑（ミウセヌ）「ぬ」。（「　」ハ重複ナルコトヲ示ス）

十七100　既畢ぬ。（鉤點「ヌ」）

十七109　天—曉（アケヌ「ぬ」）。

十七282　割崩（ぬと）。

三十6　崩（ぬ）。

二十148　死（ぬ）。

第三壺の線點「ム」・「ト」、第四壺の線點「ル」、第五壺の「ナリ」・「タリ」・「ヨリ」は三卷に共通なものである（但、卷第二十に「タリ」の用例を缺く）。卷第十四に於ては「ナリ」と「タリ」との組合せを三乃至四通り有つてをり、數度に亙る加點或いは加點の錯綜を窺はせる。卷第十七に於て第四壺の線點「ヨリ」を缺くことは、この位置に線點「ナル」が有ることに關聯してゐる。念のため、「ナル」と認定した全二例を此處に掲げておく。

十七136　所（は）寶（なる）、

十七137　寔（に）汝之力（なる）。

卷第十七の第六壺の鈎點「ヨリ」・「トイフ」・「ヌ」は獨自のものである。鈎點「ヌ」と認定した例を前に掲げたが、念のため鈎點「ヨリ」・「トイフ」と認定した例も掲げておく。

十七10　元（モト）より　ト云

十七253　三歳（といふ）

また聲點については、前號（本文篇補）に全例を示した通り、本文の漢字に附されたものより外に、訓點の片假名に附されたものが極めて多量に存し、而も單語の單位よりは長い範圍に亙つて附されてゐるものも多く、この分野に於ける極めて有益な資料となつてゐる。本文の漢字に附された聲點には二種有り、一字一音式の萬葉假名・字音語等

に朱の點發（一部圈發）を加點したものと訓假名・字音語・破音字等に墨の圈發を加點したものとである。破音字を示す點（其ノ漢字本來ノ意義デハナク派生義トシテ用ヰラレ、其ノ派生義ガ四聲ノ枠ノ何レデアルカヲ示ス點ノコト）は聲點の源泉となつた中國古來（七世紀以降）の點法であるが、岩崎本平安中期末點にも存し、古くより日本書紀に加點されてゐたことは注目すべき事柄である。前田本に於ては總て墨の圈發により加點されてをり、全二十八例の內容を示すと次の通りである〔字音表記ノ五十音順〕。

固　十四260
虎　十四269
相　二十209
殺　十四11
中　十四332
復　十四17・239・254・259・285・431
易　十四67
與　二十26
爲　十一107・十四17・208・244・253・268・291・292割・300・402・419・425・426・十七35・143

古代朝鮮語に基くものと考へられる訓點を加點されてゐる語にも

上哆唎（ヲコシタリ）　十七84墨
大后（斤於流久）　十四401割墨

君（キシ）　十四141朱・145朱・151割朱
軍君（コニキシ）　十四144墨
嶋（セマ）　十四150墨
背評（ヘコホリ）　十七266墨
上臣（マカリタチ）　十七231割墨
王子（ユシム・セシム）十四401割墨

の如く聲點が見られるが、これ等は古代朝鮮語に基く訓に對する聲點ではなく漢字音に對するものであると考へられる。字音語に對する聲點は卷第十一より外の三卷に見られるのであるが、

大會　二十170墨・178墨
汶得至　十七129墨

の如き例よりすれば六聲形式かと見られるが、實際には

王　十四73割墨・141割朱・401割墨・403墨・404割墨・410墨・411墨・413墨
王　十四261墨
王　十四151割朱
德　十四204墨・二十79墨・120墨・121墨
德　二十146墨

の如く動搖が見られ、中には

高貴　十四200墨

の如く同一箇所に二通りの聲點が見られる例も有り、新舊の形式の入り交つたものである。一字一音式萬葉假名には卷第二十より外の三卷に朱の點發による聲點が見られるのであるが、

茂（係助詞モ）十一175
茂（同右）　十一181・223・271
望（同右）　十一179
謀（同右）　十四124・126割・315・十七119・125
謀（同右）　十四322
毋（同右）　十七127
茂（終助詞モ）十一208
望（同右）　十一174
毋（同右）　十四315
毛（同右）　十一174

の如く不定である。夙に指摘されてゐる如く、平聲輕點の見られることは事實であるが、同じ語に他の箇所で平聲點を加點（移點）してゐる方が寧ろ多く、平聲輕點を意識して加點（移點）してゐたかは疑はしいものである。訓假名に對しては全四卷共に墨の圈發による聲點が見られ、これについては訓點に附されたものと內容上似通ふ要素もあるかと考へられるが、

日媛　十四81
日根　十四361
日香ヒ　十四364
朝日郎　十四382
金日尊　十七53割
活日姫　十七67
磐日　二十43
日禮部　二十84
豐日皇子　二十196

の如く一字一音式の萬葉假名よりは定まつてゐる傾向が見られるが、移點に伴ふ右と同樣の事情も免れ得てゐない。本文に附された聲點については、前田本と圖書寮本と共に存する部分に於ける異同が少いこと（次節3聲點ノ項參照）よりすれば、右の事情は前田本に至る前の元の本に於て既に生じてゐたものと考へられる。

訓點に附された聲點については、右とは事情が異る。卽ち、片假名に附された墨のゴマ點による聲點の多くは前田本にのみ存するものである。このことが直にこれ等前田本のみに存する聲點が所謂る指されたものであることを意味するわけではないが、

ヲ（痲）　十一77

ヲ（格助詞）　十一11・65・68・95・98・146・233・236・263・308・313・330・361・十四17左・35・83左・112・166・186左

・284・386・419左・420・430左

ヲハ（同右）十四 362

ミノソムタマフ（望）　十一 103

ミイメミタマハク（夢）　十一 127

ミ（接頭語）十一 5・5・11・34・42・65・73・98・98・99・113・127・184・233・十四 5・7・11左・16・45左・159・160・205・225・240・404

ミ（同右）　十四 206

ミ（同右）　十四 11

の如く、信頼度は高いものである。

サカシクマシマス（叡智）　十一 4

の如く平聲輕點と上聲點とを加點し、平聲輕點に合點を附してゐる例は、平聲輕點に神經の行屆いてゐることを示してゐる。これ等は平（低イ）、上（高イ）、去（上ル）、平輕（下ル）といふ四つの調値把握に基いて加點されてゐるものと考へられ、このシステムで單語の單位よりはかなり長い範圍に亙り加點されてゐることは誠に貴重である。この資料に於て聲調の搖れが見られる語彙については、語法をも併せ考へて聲點の實態の意味するところを見直す價値があるかと思はれる。

前田本の訓點には萬葉假名や實字訓を含むので由來の古いものと見られ勝ちであるが、これ等の中には日本紀私記・字書・辭書等に依つて加點されてゐるものも少くないかと考へられる。これ等は其の部分々々に於ては古い要素を

有つてゐても、訓點資料としての古さ・均質性の上では問題がある。實字訓を含む十七241「身ウセヌ（薨）」の「身」を圖書寮本が「ア」と誤つてゐること等は、此の箇所が元の點本では實字訓ではなかつた可能性をも示し、前田本の實字訓の性格を考へる上で注意すべき一面の有ることを示唆してゐる。また訓法の面でも

十一268　アラハニセニマホシ（不欲露）

の如きは、「ニ」が打消助動詞連用形と見られることとよりすれば由來の古い訓點のやうであるが、「マホシ」に接續してゐることとよりすれば、古い點本に由來する訓點とは見做し難く、或いは

古止與左世天（勅任）……御巫本日本紀私記上卷　　毛呂ミ御子達仁古止與左世弖（任諸子）……同上

の如く古語を志向して案出した擬古的訓法とも考へられる。

その他、假名遣の面で

二十98　モハラアシキオ「を」（元惡）

十四214左　コエ（樂）

十七269　トリウヘ（檎）

の如く、語頭オ—ヲ・語中エ—エ・語中エ—ヘ等の混亂が見られることは、加點年代を考へる上で注意すべきことである。

三、卷第十四雄略紀及卷第十七繼體紀に於ける圖書寮本との相違

兩本が共に存する部分について、1本文、2訓點、3聲點、の面より兩本を徹底比較し、其の異同を掲げて圖書寮

本との相違を明かにすることとする。

1 本文

一般的に本文の書寫と訓點の加點（移點ヲ含ム）とは同じ時期とは限らず、本資料も本文の書寫より稍々後れて加點（移點）されたものと見られ、本文の異同は必ずしも本稿の主題に關はらないが、訓點の基本であるので此處に兩本の共に存する部分についての異同を掲げておく〔各行頭の算用數字は前田本の各卷行數を示す。棒線の上段が前田本、下段が圖書寮本である。歌謠の音假名については省畧する〕。

卷第十四

8 割聖ヒ—娶　　62 誰欺 稚—誰

33 漢＼（漢ノ傍注）—（ナシ）　　78 對申—對申

53 韓朝ヒ—韓　　80 倭—和

55 媛ヒ—（ナシ）　　97 汚汚—汚

97 妊欺（任ノ傍注）—（ナシ）

120 賦歟 賊—賦

150 曰ヒ—（ナシ）

151 割 皇王ヒ—王

153 矩 知ヒ—矩

154 野ヒ—（ナシ）

198 割（堅…波）—（堅…波）也

213 軍—（ナシ）

217 包 危—色

217 於—（ナシ）

222 車ヒ 重—車重

226 侵 役—役

240 師歟（師ノ傍注）—（ナシ）

246 卽—則

248 騎—騎馬車

249 連—（ナシ）

254 麻呂—麿

254 聞 鬪—聞

260 曰大—（ナシ）

262 等―（ナシ）

264 凡―凡 凡歟

270 充―「充」ノ上ヲ「宛」ト重書

273 由―（ナシ）

275 獨―（ナシ）

276 割東―連

276 只只―咫 咫歟

281 蘗歟（菓ノ傍注）―（ナシ）

2 蕎―蕎

299 鹽堰―堰

301 謂―語

321 際―除

333 珠―珠根

356 穴歟 六―穴

357 故疑―故致疑

360 列歟（例ノ傍注）―（ナシ）

367 使人―（ナシ）

372 勝獻―勝奉獻

373 割皆—（ナシ）
383 賀—勢
390 曰—（ナシ）
391 之閒—（ナシ）
396 爰有—爰有有（衍）
400 甚其—其
407 波後—波
410 分（久ノ傍注）—（ナシ）
414 到致—致

418 艾安（又安ノ傍注）—（ナシ）
428 爲—有
434 侵寢—（「侵」ナシ）
436 伏代—代
437 既即—卽
440 桂掛—掛
441 割桂掛—掛

巻第十七〔107願天恩ヨリ圖書寮本本文アリ〕

110 急（忽ノ傍注）—（ナシ）

北大文学部紀要

前田本日本書紀院政期點

110 春ヒ日ヒ皇ヒ女ヒ—（ナシ）

113 與ヒ…底ヒ—（ナシ）

116 麼—魔

117 麼—魔

123 符—（ナシ）

123 企—尒

130 尊等ヒ—等

142 飛鳥—（「鳥」ナシ）

142 之—也

147 誠城—城

149 子ヒ呑ヒ—（ナシ）

151 多—乎

155 直—（ナシ）

160 羣—郡

161 積歟（積ノ傍注）—（ナシ）

161 置歟（置ノ傍注）—（ナシ）

161 庭歟（庭ノ傍注）—（ナシ）

165 斯奈—斯大子奈

174 密ヒ行ヒ貨ヒ―（ナシ）

177 時ヒ（肘）―時

177 倉（食敷）―食

180 舟ヒ（井）―井

181 大連―（「大」ナシ）

181 兵―近

182 今―合

183 徂敷（倶ノ注）―（ナシ）

188 民―（ナシ）

188 司―内

193 陣敷（障ノ傍注）―（ナシ）

198 壞敷（懷ノ傍注）―（ナシ）

198 色（色）（危ノ傍注）―（ナシ）

202 限―帳

204 聚ヒ（娶敷）―娶

207 微ヒ―（ナシ）

217 在ヒ於ヒ―（ナシ）

220 （内官）―也十（傍注アリ）

前田本日本書紀院政期點

231割 上臣—上位

236 狩ミ—（「ミ」ナシ）

237 過ヒ…擊ヒ—（ナシ）

239割 戊—代

243 陳—諫

244 膳ヒ（瞻）—瞻

248 奉—（ナシ）

253割 去歟（去ノ傍注）—（ナシ）

257 終—於

264 期ヒ（斯）—斯

266割 亦名—（「名」ナシ）

267 投—役

269 檜ヒ（檎）—檎

271 羅卒—（ナシ）

274 微ヒ—（ミセケチナシ）

276 阿歟（河ノ傍注）—（ナシ）

概して、前田本の方が古體を保つてをり、圖書寮本の方に不注意の誤寫が目立ち又合理化も存する。巻第十四383「伊賀」を圖書寮本が「伊勢」とし、また407「丹波」を圖書寮本が「丹波」（後）と傍注してゐること等は注意すべき事柄

である（前田本に存する「丶歟」の如き太目の筆の本文上の傍注記は後世のものであり、訓點の加點時期よりも下るものと見られる。その意味では別扱ひとすべきものとも考へられるが、一應右の本文異同一覽中に掲げておく）。

2 訓點

兩本共、片假名（含萬葉假名）・ヲコト點・實字訓による訓點が加點されてをり、兩者の多くは一致してゐるが、異同の存することも事實である。而も其の異同には一定の傾向が存し、前田本の訓を全くそのままに受繼いだものが圖書寮本の訓である等とは見做し難いものである。訓點に附されてゐる聲點の多くは圖書寮本に無く、これも大きな異同の一要素であるが、聲點については別項を立てて示すことにする。

以下に、兩本の共に存する部分についての訓點の異同の全例を掲げる〔掲出要領は、前項「本文」に同じく、前田本の各卷行數を示し、棒線の上段に前田本・下段に圖書寮本の訓を示す。本項では、便宜上、各行頭に用例番號を附す。猶、熟合符・訓合符の合符も相當に多く異つてゐるが、繁雜になるので此の一覽よりは省いてある。合符の一致の度合は、片假名訓・ヲコト點よりは相當に劣つてゐる〕。

巻第十四

(1) 15　モノモノタマハス（語）―モノタマハス
(2) 17　トヒ（劾）―ヒト
(3) 21　ミヤ（室）―（「ヤ」ヲ「カ」ト誤ル）
(4) 22　カ（臣）―（ナシ）
(5) 24　アシユヒアユヒ（脚帶ノ右訓）―（左訓）
(6) 35　（付囑）―ユタネタマハ（左訓アリ）
(7) 35　事ニて―（「ニて」ナシ）
(8) 36　の（郊）―（ナシ）
(9) 43　シラス（不解ノ右訓）―（ナシ）

(10) 45 思ノホカニ（不意）—（「ノ」ナシ）
(11) 46 トラハ（捉ノ右訓）—（左訓）
(12) 48 ツカサ（司）—（ナシ）
(13) 55 柱（二）—（ナシ）
(14) 58 なり）（女ノ墨點）—（ナシ）
(15) 66 イラツ（娘子）—イラス
(16) 66 ヲムナ（娘子ノ左訓）—（ナシ）
(17) 66 サフラヘリ（奉ノ左訓）—（ナシ）
(18) 71 割コムラ（股合ノ左訓）—（右訓）
(19) 73 割カサラシ（莊飾）—カサラシム
(20) 73 割□洛反（適）—（ナシ）
(21) 76 ツ（盡）—ツク
(22) 76 モトホリアソヒ（相羊）—（ナシ）
(23) 77 令作（割ノ左訓）—（ナシ）
(24) 78 トモニ　イラ（與）—イカニ
(25) 80 御財（民ノ右訓）—（左訓）
(26) 80 ツ（怖ノ左訓）—（右訓）
(27) 82 む（不ノ墨點）—（ナシ）
(28) 82 か（汝）—の
(29) 83 ウツラカヒ（携手ノ左訓）—ウツカラヒ
(30) 84 コトノリノ（野ノ左訓ニ誤ル）—（85詔ノ右訓）
(31) 84 オノレ（朕）—ワレ
(32) 87 ケム（難ノ左訓）—（合點アリ）
(33) 88 キヤヒ（跪禮）—（「ヤ」ヲ「カ」ト誤ル）
(34) 91 む（爲ノ墨點）—（ナシ）
(35) 93 へ（部）—（ナシ）
(36) 95 なり）（等ノ墨點）—（ナシ）
(37) 97 たり）（使ノ墨點）—（ナシ）
(38) 99 アサムキテ（僞…ノ左訓）—（「キ」ヲ「イ」トス）
(39) 100 シメ（問）—（合點ナシ）
(40) 101 の（人）—ノ
(41) 101 アリカヌ所（不行）—アリカヌトコロ

(42) 102 ヲトメ（覓）—（「ヲ」ナシ）
(43) 104 立處（移行ノ左訓）—（103起處ノ左訓）
(44) 107 フ（獵）—（ナシ）
(45) 108 なり）（神）—なりと（墨點）
(46) 113 オクリタテマタヒテ（送）—オクリタテマタ
(47) 113 マヒ＼イタル（水）—（ナシ）
(48) 113 イキホヒ（德）—（ナシ）
(49) 117 ホ（讃ノ左訓）—（右訓）
(50) 118 ム（武）—（ナシ）
(51) 118 タ（拖）—タリ
(52) 119 セ（居）—（ナシ）
(53) 119 （飫）—オ
(54) 119 ホ（哀）—（ナシ）
(55) 127 小＼（野）—（ナシ）
(56) 129 ツ□メ（努ゝ力ゝ）—ツトメ　ツトメ
(57) 131 止。—（讀點ナシ）
(58) 132 （緣）—ノホリ（左訓アリ）
(59) 136 （曳）—エ
(60) 137 アサメマツリタマフ（止）—（「ア」ナシ）
(61) 138 カリシタマヒ（安野ノ左訓）—（ナシ）
(62) 138 寧也（無乃ノ左訓）—（ナシ）
(63) 141 割カフ（蓋）—（ナシ）
(64) 144 コキシ（奉ノ右訓ニ誤ル）—（143軍君ノ左訓）
(65) 145 キシ（君）—（ナシ）
(66) 147 （イツ）コナリ（トモ）（何處ノ右訓）—（ナシ）
(67) 148 たり）（り）（產ノ墨點）—リ
(68) 153 ナリカタチ（體勢）—（合點ナシ）
(69) 158 （事）—を。
(70) 158 カヒコ（蠶）—コカヒ
(71) 160 ヒタ（養ノ左訓）—ヒテ
(72) 160 ミヱシ（宮）—ミキシ
(73) 164 たり）（過ノ墨點）—（ナシ）

(74) 165 ヒカリヒロメキテ（ラ養老 恤ミ）—（「ラ養老」ナシ）
(75) 166 ミ（目）—（ナシ）
(76) 169 ク（言）—（ナシ）
(77) 170 ノ（皇）—（ナシ）
(78) 171 カツ（勝）—（ナシ）
(79) 171 （天皇鶏）—ミニハトリ（鶏）
(80) 172 を（鈴（消））—（ナシ）
(81) 175 カ（側ノ左訓）—（ナシ）
(82) 175 ホメカタラ（リテ 稱）—（「ラ」ナシ）
(83) 175 コマヤカニ（茂）—（「ニ」ナシ）
(84) 176 クサ〳〵ノ（種）—（「ノ」ナシ）
(85) 177 フスヘマシフルコトナシ（無加ノ左訓）—（「ナシ」ナシ）
(86) 179 メシ豆（幸）—（「豆」ヲ「ツ」トス）
(87) 179 ミマナノクニノミコトモチト（生…）—（合點ナシ）
(88) 179 たり（生ノ墨點）—（ナシ）
(89) 181 ツカヘ（事）—（「ヘ」ナシ）
(90) 183 アヤノ（漢）—（「ノ」ナシ）
(91) 185 （下）—タマヒ
(92) 186 ヨ（令）—（ナシ）
(93) 186 の（命）—（ナシ）
(94) 186 オホムコトヲフヽミテ（銜命ノ左訓）—（「ミ」ヲ「ム」トス）
(95) 187 （右訓）ツ（左訓）クニツ（國）—（右訓・左訓トモ一字上ノ「國」ニ誤リテ加點）
(96) 188 行一日ニ而テ—行一日ニ而テ
(97) 191 の（何）—（ナシ）
(98) 191 む（伐ノ墨點）—（ナシ）
(99) 192 か（吾ノ墨點）—（ナシ）
(100) 192 に（遂）—（ナシ）
(101) 192 割（ク）タリ（上文ノ左訓）—クタリ（右訓）
(102) 192 む（及）—（ナシ）
(103) 193 タテヽ（蹻ノ左訓）—（194據ノ右訓ニ誤ル）

(104) 194 レ（勿）—（ナシ）
(105) 197 なり）（在ノ墨點）—（ナシ）
(106) 197 ハムヘラス（不在ノ左訓）—（「ス」ヲ「サル」トス）
(107) 198 カタシハ（堅磐）—（「ハ」ヲ「ヘ」ト誤ル）
(108) 198 ハムヘラル（安置）—（ナシ）
(109) 200 アヤノ（漢）—アヤヘノ
(110) 200 スエツクリヘ（陶部）—（「エ」ヲ「キ」ト誤ル）
(111) 201 ナ（那）—（ナシ）
(112) 202 原、—原の
(113) 204 ハカトコ（博徳）—ハカトコロ
(114) 206 に（心）—（ナシ）
(115) 208 割は（此）—（ナシ）
(116) 208 （汝國）—アカシマニ（207取假ノ左訓ノ誤）
(117) 209 を（腹）—（ナシ）
(118) 210 タリ（後ノ右訓）—（左訓）
(119) 210 ニ（遂）—（ナシ）
(120) 210 （所）—を
(121) 210 カタラヒヲ（語）—（「ヲ」ナシ）
(122) 214 （足流）—スル（左訓アリ）
(123) 214 □ヱ（樂）—コキ
(124) 215 舞—舞て
(125) 215 （盡）—に
(126) 216 モ（然）—（ナシ）
(127) 217 カ（卵）—（ナシ）
(128) 217 なり）（所ノ墨點）—（ナシ）
(129) 218 御琴持（府ノ左訓）—（ナシ）
(130) 218 ミイクサニ（元□）—（ナシ）
(131) 219 ノ（膳）—（ナシ）
(132) 221 勞軍。を 令軍—勞軍令軍。を（誤）
(133) 221 む（令）—（ナシ）
(134) 221 む（攻）—（ナシ）
(135) 221 ウタむ（攻）—（「む」ナシ）

(136) 222 ヤ（過）―（ナシ）
(137) 222 （重）―（「こと」アリ）
(138) 223 たり）（爲）―（ナシ）
(139) 225 （至）―て
(140) 225 强。―（句點ナシ）
(141) 226 ナラマシ（殆）―（ナシ）
(142) 226 奉也（背ノ左訓）―（ナシ）
(143) 228 カ（香）―（ナシ）
(144) 229 シむ（祠）―（ナシ）
(145) 229 の（方）―ノ
(146) 230 カムニハ（祈ノ右ノ誤訓）―（ナシ）
(147) 230 は（祈）―（ナシ）
(148) 238 む（呑）―（ナシ）
(149) 239 ヲサムル（脩）―（「ヲ」ヲ「オ」トス）
(150) 239 脩。―（句點ナシ）
(151) 240 ヨタリノフV（四卿ノ左訓）―ナシ
(152) 240 セメ（薄ノ右訓）―（左訓）
(153) 240 伐天（ウチヲ）―伐天（ウチヲ）
(154) 246 ユキ（行）―ユク
(155) 246 取也（屠ノ右訓）―（左訓）
(156) 246 割に（竝）―（ナシ）
(157) 247 （喙）―音德（傍注アリ）
(158) 251 サキノ（前）―（「ノ」ナシ）
(159) 253 （也）―也。（句點アリ）
(160) 254 むと（全）―（ナシ）
(161) 256 夏・五月―・夏五月
(162) 259 （大磐宿禰）―（大磐宿）禰にて
(163) 259 む（執）―（ナシ）
(164) 260 に（官）―（ナシ）
(165) 260 コスシ（固ノ左訓ノ位置）―（261王ノ右訓）
(166) 261 ココキシ（王ノ左訓）―コニキシ
(167) 262 マセヨ（垂降臨）―マセロ
(168) 262 馬ノ口ヲ（轡ノ左訓）―（右訓）
(169) 262 ユ（往ノ左訓）―（右訓）

(170) 263 ノ（磐）―（ナシ）
(171) 263 に（河）―（ナシ）
(172) 263 の（（韓子宿）禰）―（ナシ）
(173) 264 シリ□クラホネヲ（後橋）―（「ヲ」ナシ）
(174) 265 の（三）―ノ
(175) 266 す（還）―ヌ
(176) 267 タマヘ（來ノ左訓ノ位置）―（ナシ）
(177) 269 の（龍）―ノ
(178) 269 （衝）―ク（左下訓アリ）
(179) 269 て（然）―（ナシ）
(180) 270 遠國也（萬里）―（「也」ナシ）
(181) 271 （紀卿）―マフチキミ（左訓アリ）
(182) 275 コトニ（別）―（「ニ」ナシ）
(183) 275 の（火）―（ナシ）
(184) 276 ツノ（角）―（ナシ）
(185) 276 周防地（角國ノ左訓）―（「防」ヲ「方」トス）
(186) 278 む（使）―（ナシ）
(187) 279 マサク（言）―マウサ
(188) 280 （郡）―ノ
(189) 280 人、―人の
(190) 280 オヒト（首）―（ナシ）
(191) 281 ウマハリセリト（產ノ左訓）―（ナシ）
(192) 282 モコトカニシて（渡畧）―（「ト」ナシ、「て」ヲ「テ」トス）
(193) 282 アカシマニタカクヌケイテ（欻聳擢）―（「シ」ヲ「サ」トス）
(194) 283 のに（鴻）―（ナシ）
(195) 283 カキ（相ノ左訓）―（284竝ノ右訓トス）
(196) 283 タテリ（發）―（ナシ）
(197) 283 ホリス（欲ノ左訓）―（右訓）
(198) 284 クモノミチヽリノミチニエエ（絕於埃塵）―（「ニ」ナシ、「エエ」ハ「コエ」トス）
(199) 285 ホ流毋可爾（於滅沒）―（「ホ」ナシ）

(200) 285 マタラヲノ（驄）—ミタラノ
(201) 286 トキ馬（駿ノ左訓）—（右訓、「馬」ヲ「ム マ」トス）
(202) 286 の（孫）—む（誤）
(203) 286 ワカレハ□ヌ（取別）—ワカレヌ　ハヌ
(204) 287 厩。—（句點ナシ）
(205) 287 と（解）—（ナシ）
(206) 291 （獻）—獻、（讀點アリ）
(207) 292 割ヌウ（嶺）—（ナシ）
(208) 292 是ニ—（「ニ」ナシ）
(209) 293 を（贖）—（ナシ）
(210) 294 タテマツレル（獻）—（「レ」ナシ）
(211) 294 （輕）—の
(212) 297 （消）タタナ（谷）—（ナシ）
(213) 299 坂（壇）—（ナシ）
(214) 301 て（謂）—（ナシ）
(215) 302 食。—（句點ナシ）
(216) 304 ツマ（聚）—（「マ」ナシ）
(217) 306 アヲ（青）—ヲア
(218) 310 ミケツモノ（饌）—ミツケモノ
(219) 310 割ミケツモノ（御膳之物）—ミツケモノ
(220) 311 ヲカセリト（妬）—（「セ」ヲ「サ」トス）
(221) 311 オホシス（念）—（「シ」ナシ）
(222) 311 に（將）—（ナシ）
(223) 311 殺也（刑ノ左訓）—（ナシ）
(224) 311 タマフ（付）—（ナシ）
(225) 312 オモト（公）—（ナシ）
(226) 312 ハヘリ（侍）—ハムヘリ
(227) 313 奴能。—（句點ナシ）
(228) 314 麻泥爾。—（句點ナシ）
(229) 316 （彌）—ミ
(230) 316 （皤）—ハ
(231) 318 か（彥）—（ナシ）
(232) 318 命、—（讀點ナシ）

(233) 320 セメ（責）—（「メ」ナシ）
(234) 321 マ（麼）—（ナシ）
(235) 321 シ（思）—（ナシ）
(236) 322 ケ（稽）—（ナシ）
(237) 323 む（置）—（ナシ）
(238) 324 （香）—カ
(239) 324 所（土）—（ナシ）
(240) 325 （御）—ミ
(241) 325 シ（石）—（ナシ）
(242) 325 チカラ（力）—（「チ」ヲ「イ」ト誤ル）
(243) 326 （虐）—を
(244) 328 キ（領）—（ナシ）
(245) 329 たり）「たり」（燒）—（ナシ）
(246) 330 の（石）—（ナシ）
(247) 331 シ（爲）—（ナシ）
(248) 331 （斧）—ヲノヲ（左訓アリ）
(249) 331 （材）—を
(250) 332 （中）—て
(251) 333 キセ（着）—（ナシ）
(252) 334 オモホエスシテ（不覺）—（「モ」ナシ）
(253) 334 タノアヤマチ（手誤ノ左訓）—（ナシ）
(254) 335 セメ（嘖）—メセ
(255) 335 タヽシカラヌ（不真）—（「ヌ」ナシ）
(256) 336 アタラシヒテ（惜）—（「テ」ナシ）
(257) 337 ケ（該）—（ナシ）
(258) 338 （預）—預。（句點アリ）
(259) 339 哉。—（句點ナシ）
(260) 340 を（使）—（ナシ）
(261) 340 （駒）—を
(262) 340 拖磨能。—（句點ナシ）
(263) 340 柯彼能。—（句點ナシ）
(264) 340 古磨。—（句點ナシ）
(265) 340 播。—（句點ナシ）
(266) 341 柯彼能。—（句點ナシ）

(267) 344 ト「と」（使）—（ナシ）
(268) 344 キ（將）—（ナシ）
(269) 346 の（臣）—（ナシ）
(270) 346 に（連）—（ナシ）
(271) 346 連に—（「に」ナシ）
(272) 346 を（使）—（ナシ）
(273) 346 使。—（句點ナシ）
(274) 346 ハムヘラシム（安置）—ハヘラシム
(275) 346 む（置）—（ナシ）
(276) 346 たり）（置）—（ナシ）
(277) 347 と（原）—（ナシ）
(278) 347 と（部）—（ナシ）
(279) 350 者、—（讀點ナシ）
(280) 350 む（好）—（ナシ）
(281) 350 ネノオヤ（根使主ノ左訓）—（右訓）
(282) 350 む（可）—（ナシ）
(283) 351 イヒタケヒト（共食者ノ右訓）—（左訓）
(284) 351 カム（上）—（「ム」ナシ）
(285) 351 ヌキ（拔ノ左訓）—（ナシ）
(286) 353 「と」（欲ノ線點）—（ナシ）
(287) 355 欲、—（讀點ナシ）
(288) 355 タマフ）（哀）—（ナシ）
(289) 356 か（妾）—（ナシ）
(290) 358 （覺）—に
(291) 358 を（主）—（ナシ）
(292) 359 なり）（慈）—（ナシ）
(293) 360 コムマコヤソツヽキ（子と孫と八十聰綿）—コムマコヤソツヽキニ
(294) 361 イナ（稻ノ左訓）—（ナシ）
(295) 363 ミツキ（負）—（「ミ」ナシ）
(296) 364 （大草香部吉士）—に（士）
(297) 365 の（等）—（ナシ）
(298) 366 割の（主）—（ナシ）
(299) 366 は（城）—（ナシ）

(300) 366 カ（我）—（ナシ）
(301) 366 の（父）—ノ
(302) 367 （見）—ミ
(303) 369 ネカヒノマニ〳〵（隨欲）—（「マニ〳〵」ハ「マヽニ」）
(304) 369 ツカマツラシム（駈使ノ左訓）—（ナシ）
(305) 378 ミケツ物（御膳）—（「物」ヲ「モノ」トス）
(306) 380 ニヘ（贄）—（「ヘ」ヲ「ケ」ト誤ル）
(307) 382 の（目）—（ナシ）
(308) 382 アサヒイラツコ（朝日）—（「イラツコ」ナシ）
(309) 383 ホコリ（矜）—（「ホ」ヲ「オ」ト誤ル）
(310) 383 ミ（軍ノ左訓ニ誤ル）—（384官軍ノ右訓）
(311) 383 か（郎）—（ナシ）
(312) 384 トホス（穿）—トホル
(313) 385 守（持）—（ナシ）
(314) 386 タケヒシメ（叱）—（「メ」ヲ「ヌ」ト誤ル）
(315) 386 む（進）—（ナシ）
(316) 387 ル（入）—シ
(317) 388 ノ（ミ）—（ナシ）
(318) 389 コロ　ツ（斬）—コロシツ
(319) 391 云ヒト（別）—イフ人
(320) 392 トラヘ（擒ノ左訓）—（ナシ）
(321) 392 に（而）—（ナシ）
(322) 395 の（丙）—（ナシ）
(323) 396 へ廿—（科點ナシ）
(324) 396 ホロホす（盡）—ホロホス
(325) 397 下。—（句點ナシ）
(326) 398 （非常）—アヤシ（左訓アリ）
(327) 399 マ（更）—に
(328) 399 ムマハリナムカ（蔓生）—ムマハリナカム
(329) 399 「む」（除）—（ナシ）
(330) 400 を（本）—（ナシ）
(331) 400 矣。—（句點ナシ）

(332) 401 む（止）—（ナシ）
(333) 401 割て（陷）—（ナシ）
(334) 401 割□□ルテ（降陷ノ左訓）—ヤフレテ
(335) 401 割由シム（王子）—（「由」ヲ「ユ」トス）
(336) 401 割シヌ（没ノ右訓）—（左訓）
(337) 402 を（利）—（ナシ）
(338) 403 に（王）—（ナシ）
(339) 403 ヘスヘシ（倉下ノ左訓）—ヘスフシ
(340) 405 割の（呼）—（ナシ）
(341) 407 （遂）—に
(342) 408 （相）—アヒ
(343) 408 シタカヒヌ（遂）（「ヌ」ハ元來次字「入」ノ訓）—（「ヌ」ナシ）
(344) 408 （入）—ヌ
(345) 410 身ウキヌ（薨）—（「身」ナシ）
(346) 411 の（王）—（ナシ）
(347) 411 裏ぺて（消）—裏ヘて（句點ナシ、「て」アリ）
(348) 411 ミ（勅）—（ナシ）
(349) 412 爲む（使）—（ナシ）
(350) 414 の（船）—（ナシ）
(351) 414 （師）—を
(352) 415 御疾シタマフ（寢疾不預）—（「シタマフ」ナシ）
(353) 415 ユタネタマフ（付ノ左訓）—（「ネ」ヲ「ニ」トス）
(354) 418 天下（區宇）—（ナシ）
(355) 419 （區夏）—クニノウチヲ（左訓アリ）
(356) 420 三門マキリシヌ（朝參）—（「三門」ヲ「ミカト」、「キ」ヲ「イ」トス、「ス」ナシ）
(357) 420 む（不）—（ナシ）
(358) 421 に（情）—（ナシ）
(359) 421 む（欲）—（ナシ）
(360) 421 人（令）—（ナシ）
(361) 422 次（留）—（ナシ）

(362) 422 ヒトノ（人）—（「ノ」ナシ）
(363) 423 なり）（分）—（ナシ）
(364) 423 む（足）—（ナシ）
(365) 424 善。—（句點ナシ）
(366) 426 と（爲）—（ナシ）
(367) 427 リ（闕）—（ナシ）
(368) 427 （知臣）—に（知）
(369) 428 ア（遍）—（ナシ）
(370) 429 ナルツキ（大業ノ左訓）—ナルツキヲ（右訓）
(371) 429 業。（を）—（を點、句點共ニナシ）
(372) 429 コトワリニオイ（理）—コトワリニオイテ
(373) 430 に（國）—（ナシ）
(374) 430 ヒトヲメクミ（仁ノ左訓）—（「ヒト」ヲ「人」トス）
(375) 430 オヤニシタマフミチ（孝ノ左訓）—（「マ」ナシ）
(376) 430 カキ（誤）へ（其）—（ナシ）
(377) 431 下、—（讀點ナシ）
(378) 431 む（所）—（ナシ）
(379) 431 マタ（復）—（ナシ）
(380) 432 割たり）（聞）—（ナシ）
(381) 432 割ソ（害ノ左訓）—（ナシ）
(382) 432 割リ（多ノ左訓）—（ナシ）
(383) 432 代、—（讀點ナシ）
(384) 433 たり）（過）—（ナシ）
(385) 433 ヒキキタル（率）—ヒキキル
(386) 434 スヘヲサメタマフ（領制）—スヘラヲサメタマフ
(387) 435 より）（家）—（ナシ）
(388) 435 に（家）—（ナシ）
(389) 435 て（來）—（ナシ）
(390) 436 ユミツル打ス（彈弓弦）—（「打」ヲ「ウチ」トス）
(391) 437 シ（伏）—（ナシ）

(392) 439 耶。—(句點ナシ)
(393) 439 古。—(句點ナシ)
(394) 439 曾。—(句點ナシ)
(395) 440 播。—(句點ナシ)
(396) 440 那。—(句點ナシ)
(397) 441 ツ(殺)—ヌ
(398) 441 割コロサシメ□(殺)—(「サ」ナシ)

巻第十七〔107願天恩ヨリ圖書寮本本文アリ〕

(1) 107 コトワリタマ(判ノ右訓)—(左訓)
(2) 107 へ(還ノ左訓)—(右訓)
(3) 108 コキセシム(太子)—(ナシ)
(4) 110 ミヤヒ(藥)—(ナシ)
(5) 110 たり)(形)—(ナシ)
(6) 116 ハ(麼)—(ナシ、但、本文「魔」)
(7) 119 武。—(句點ナシ)
(8) 122 余囊開。—(句點ナシ)
(9) 124 我、—(讀點ナシ)
(10) 124 ホ(明)—(ナシ)
(11) 125 府。—(句點ナシ)
(12) 129 國名(斯羅ノ傍注)—國名也
(13) 129 音遲(至)—(ナシ)
(14) 130 ウケタマハリ(奏)—マウケタマハリヌ 奉
(15) 132 に(而)—(ナシ)
(16) 132 に(終)—(ナシ)
(17) 137 イタハリ(功)—(ナシ)
(18) 137 なる)(力)—(ナシ)
(19) 140 に(常)—(ナシ)
(20) 143 マホリ(護)—マモリ
(21) 143 オノカコ(子)—オノカコヲ
(22) 143 シタ(中)—(ナシ)
(23) 143 (窟)—窟。(句點アリ)
(24) 147 (築)—に
(25) 149 ワタス(絙)—ワタル
(26) 151 (類)—モノ

(27) 153 と（罷）―（ナシ）
(28) 153 罷。―（句點ナシ）
(29) 156 ハツリ（脱ノ左訓）―（ナシ）
(30) 158 に（羅）―（ナシ）
(31) 161 カネ（鐵）―（ナシ）
(32) 161 庭。―（句點ナシ）
(33) 162 なり）（優）―（ナシ）
(34) 162 節。―（句點ナシ）
(35) 163 むと（代）―（ナシ）
(36) 170 イク（衆）―イクサ
(37) 171 呑―（返點ナシ）
(38) 172 に（那）―（ナシ）
(39) 174 勸、―（讀點ナシ）
(40) 177 タルに（爲）―（ナシ）
(41) 177 （使）―タル
(42) 177 ツカヒ（使）―（ナシ）
(43) 177 と（伴）―（ナシ）
(44) 177 （伴）―の
(45) 179 ト、マリテ（滯）―ト、コホリテ
(46) 179 （伴）―の
(47) 182 となり）（可）―（ナシ）
(48) 182 （可）―ヤ（左訓アリ）
(49) 185 より）（臣）―（ナシ）
(50) 185 罰。―（讀點ナシ）
(51) 186 クルシキ（塗炭ノ右訓）―（左訓）
(52) 187 恩こ―（「こ」ナシ）
(53) 188 イノチ（司命）―（ナシ、但、內命）
(54) 188 （於）―て
(55) 189 より）（門）―（ナシ）
(56) 190 より）（紫）―（ナシ）
(57) 193 ミヲスツル（死ノ左訓）―（ナシ）
(58) 193 （地）―地。（句點アリ）
(59) 194 ツミセラレ（誅）―（ナシ）
(60) 198 （危）―と

(61) 199 路。—(句點ナシ)
(62) 203 嶋。—(句點ナシ)
(63) 207 を(使)—(ナシ)
(64) 209 婦て—(「て」ナシ)
(65) 213 オヒミノリコトノコトヲ(詔勅)—(「ヒ」ノ上ニ「モ」ト重書、「コトヲ」ノ「コ」ナシ)
(66) 213 む(破)—(ナシ)
(67) 213 ミヤコ(官家)—ニヤケ
(68) 216 の(人)—(ナシ)
(69) 218 ・夏四月—(科點ナシ)
(70) 219 品タノ(胎中)—(「タ」ヲ「田」トス)
(71) 221 越、—(讀點ナシ)
(72) 223 アマナハシム(和解ノ左訓)—(「マ」ヲ「へ」ト誤ル)
(73) 225 ミ(彌)—(ナシ)
(74) 227 スコシキナル(小)—(「ル」ヲ「リ」トス)
(75) 227 オホイナル(大ノ右訓)—(左訓)
(76) 230 オ(畏)—(ナシ)
(77) 230 オカキミ(王)—(ナシ)
(78) 230 オホキマツキミ(上臣)—(「キ」ヲ「イ」トス)
(79) 231 シ(叱)—(ナシ)
(80) 231 岐て—(「て」ナシ)
(81) 232 アマタアルヲ(數千)—(「ヲ」ナシ)
(82) 232 より(川)—(ナシ)
(83) 234 □カス(不敬歸)—トリツカスシテ
(84) 234 ヨリコ(ミセケチ) ヨリコ(歸)—ヨリコ
(85) 234 宣。(消)—(「。(消)」ナシ)
(86) 235 ムラサトニ(聚落)—(「ニ」ナシ)
(87) 238 ミコトノリ(勅)—(「ノ」ヲ「ナ」ト誤ル)
(88) 238 コロサムトアリケリ(誅戮)—コロサムトナリケリ
(89) 238 乃、—(讀點ナシ)

(90) 238 アルカタチ（所見）—（「ア」ヲ「ミ」トス）
(91) 241 身ウセヌ（薨）—（「身」ヲ「ア（「ミ」ノ誤）」トス）
(92) 243 大夫也（臣）—（ナシ）
(93) 244 ニ（瓊）—（ナシ）
(94) 244 （君）—君、（讀點アリ）
(95) 245 ナカコロオコル（中興）—（「オコル」ヲ「オコレル」トス）
(96) 245 より（嘗）—（ナシ）
(97) 246 癌。—癌。
(98) 247 大、—（讀點ナシ）
(99) 249 觀。（消）—（句點ナシ）
(100) 249 之、（左消）—之、
(101) 249 佐。（左消）—佐。
(102) 249 年。（左消）—年。
(103) 249 （天）—の
(104) 250 脉（地）—丿（ナシ）
(105) 251 む（成）—（ナシ）
(106) 251 を（人）—（ナシ）
(107) 251 ユツルコト（廉節ノ左訓）—（ナシ）
(108) 252 ・秋九月—（科點ナシ）
(109) 253 羅て—（「て」ナシ）
(110) 253 造、—（讀點ナシ）
(111) 253 割といふ（歳ノ墨點）—（ナシ）
(112) 253 割カトフ（去來ノ左訓）—（ナシ）
(113) 254 の（那）—（ナシ）
(114) 254 定也（決）—ナシ
(115) 256 タヽレ（爛）—（ナシ）
(116) 257 に（終）—（ナシ、但、本文「於」）
(117) 259 ミヤコ（京鄕）—ミヤコニ
(118) 259 ハツカシクオモナイコト（慙惡）—（「オモナイコト」ナシ）
(119) 260 ウメナヒ申ムヲ（謝罪）—（「メ」ヲ「ヘ」トス）

(120) 260 タテマタシモテノチ（奉使之後）—（「モ」ナシ）
(121) 261 とき（先）—に
(122) 263 （爲）—を
(123) 263 カヘリマテネ（歸朝）—（「マテネ」ヲ「マウテネ」トス）
(124) 264 （迹）—（「て」アリ）
(125) 264 （心）—に
(126) 265 シ（使）—（ナシ）
(127) 265 （羅）—（「て」アリ）
(128) 266 コホリ（許ノ左訓）—（ナシ）
(129) 267 クヒカシ（枷ノ右訓）—（左訓）
(130) 267 カナツカリ（鑠）—（「リ」ヲ「ラ」トス）
(131) 268 野ど。—（句點ナシ）
(132) 268 城て—（「て」ナシ）
(133) 269 トリウヘ（可檎）—（「へ」ナシ）
(134) 269 經也（淹留）—（「也」ナシ）
(135) 269 （城）—を
(136) 272 人、—（讀點ナシ）
(137) 276 美能。—（句點ナシ）
(138) 276 伊。—（句點ナシ）
(139) 277 樓。目—樓目。（誤）
(140) 278 ク（履）—クル
(141) 278 鳴。—（句點ナシ）
(142) 281 ハナニ。—（句點ナシ）
(143) 282 割ぬと（崩）—（「と」ナシ）
(144) 282 割トシ（亥）—（ナシ）
(145) 282 割音胡（乞）—（ナシ）
(146) 283 割音德（乇）—（ナシ）
(147) 283 割薨。—（句點ナシ）
(148) 283 割是て—（「て」ナシ）

以上、卷第十四に三百九十八例、卷第十七に百四十八例、計五百四十六例の異同が見られる。この外に、一見前田本

に無く圖書寮本のみに訓點が存する如くであるが、丁度訓點の箇所が損傷してゐる爲で、元來前田本にも存して兩本の間に違ひは無かつたものと見られる例が若干存する。念のため、これらを次に掲げておく（前の本文篇には、これらは示して無い）。

巻第十四

8割オホキミ（王）
144 タカヒ（違）
187 ナリ（化爲）
188 ことを（遠）
212 にて（盡）
212 の（國）
215 ヌ（入）
218 に（等）
222 （險）ニテ
226 （乘）ニテ
233 （焉）。
239 リて（心）
241 ツヽシミ（龔ノ左訓）
245 に（禰）
247 に（面）
250 て（振）
253 を（處）
254 て（鬪）聞
254 シヌ（陷ノ左訓）
259 の（禰）
266 （喪）ニテ
275 の（紀）
281 （也）。
291 （紫）。
291 ノ（是）
293 フ（許）
297 の（瀨）

303 に（故）
307 （吳）。
311 の（秦）
312 の（琴）
327 （舶）にて
327 に（悉）
327 ノリ（法）
332 （所）にて
339 ナケキ（喟然）
340 トク（解）
343 ム（身）
345 ノ（是）
346 て（因）
360 す（欲）
364 （姓）にて
367 を（宅）
369 の（秦）
379 の（內）
379 の（國—伊勢國）
379 の（形）
381 （禰）、
382 （郎）。
384 （懼）。
384 の（代）
386 に（中）
387 ヨ（甲）。
388 トラヘ（獲）
391 て（怯）
394 キ（猪）
396 の（許）
400 に（皇）
401 割こと（攻）
401 割コニサシ（大城）
404 割（コ）ム（久麻）

404 割を（利ニて）
406 シラカ（白髪）
408 の（嶋）
415 （天皇）、
417 の（東）
419 （一日）、
421 は（庶）
422 （謂）、
425 （姓）。
427 を（臣）
432 割を（子）
441 割（掛桂）ニて
卷第十七〔107願天恩ヨリ〕
128 （堤）。
131 ノル（宣）
134 ラ（安）
179 レ（見）

以上である。これ等は除いて、前に掲げた五百四十六例の異同を分類して示すと、次の如くになる〔各用例は、前に附した用例番號にて示す〕。

i）前田本のみに存するもの……三百十二例

(1)片假名訓……九十八例

十四(4)・(9)・(12)・(16)・(17)・(22)・(35)・(44)・(47)・(48)・(50)・(52)・(54)・(61)・(63)・(65)・(66)・(74)・(75)・(76)・(77)・(78)・(81)・(92)・(104)・(108)・(111)・(119)・(126)・(127)・(130)・(131)・(136)・(141)・(143)・(144)・(146)・(151)・(170)・(176)・(184)・(190)・(191)・(196)・(207)・(212)・(224)・(225)・(234)・(235)・(236)・(241)・(244)・(247)・(251)・(253)・(257)・(267)・(268)・(285)・(294)・(300)・(304)・(317)・(320)・(348)・(352)・(367)・(369)・(376)・(379)・(381)・(382)・(391)・十七

(3)・(4)・(6)・(10)・(17)・(22)・(29)・(31)・(40)・(42)・(53)・(57)・(59)・(73)・(76)・(84)・(93)・(107)・(112)・(115)・(118)・(126)・(128)・(144)

以上九十八例。

(2)ヲコト點……百二十八例

十四(7)・(8)・(14)・(27)・(34)・(36)・(37)・(73)・(80)・(88)・(93)・(97)・(98)・(99)・(100)・(102)・(105)・(114)・(115)・(117)・(128)・(133)・(134)・(135)・(138)・(144)・(147)・(148)・(156)・(160)・(163)・(164)・(171)・(172)・(179)・(183)・(186)・(194)・(205)・(208)・(209)・(214)・(222)・(231)・(237)・(245)・(246)・(260)・(267)・(269)・(270)・(271)・(272)・(275)・(276)・(277)・(278)・(280)・(282)・(286)・(289)・(291)・(292)・(297)・(298)・(299)・(307)・(311)・(315)・(321)・(322)・(329)・(330)・(332)・(333)・(337)・(338)・(340)・(346)・(349)・(350)・(357)・(358)・(359)・(363)・(364)・(366)・(371)・(373)・(378)・(380)・(384)・(387)・(388)・(389)・十七(5)・(15)・(16)・(18)・(19)・(27)・(30)・(33)・(35)・(38)・(40)・(43)・(47)・(49)・(52)・(55)・(56)・(63)・(64)・(66)・(68)・(80)・(82)・(96)・(105)・(106)・(109)・(111)・(113)・(116)・(132)・(143)・(148)

以上百二十八例。

(3)實字訓・漢文注……十八例

十四(13)・(23)・(55)・(62)・(129)・(142)・(213)・(223)・(239)・(288)・(313)・(345)・(354)・(360)・(361)・十七(92)・(104)・(114)

以上十八例。

(4)反切・直音注……四例

十四(20)・十七(13)・(145)・(146)

以上四例。

(5)返點・句讀點・科點……六十一例

十四(57)・(140)・(150)・(204)・(215)・(227)・(228)・(232)・(259)・(262)・(263)・(264)・(265)・(266)・(273)・(279)・(287)・(323)・(325)・(331)・(365)・(371)・(377)・(383)・(392)・(393)・(394)・(395)・(396)・十七(7)・(8)・(9)・(11)・(28)・(32)・(34)・(37)・(39)・(50)・(61)・(62)・(69)・(71)・(85)・(89)・(97)・(98)・(99)・(100)・(101)・(102)・(108)・(110)・(131)・(136)・(137)・(138)・(139)・(141)・(142)・(147)

以上六十一例。

(6)合點……三例

十四(39)・(68)・(87)

以上三例。

ii)圖書寮本のみに存するもの……六十一例

(1)片假名訓……二十四例

十四(53)・(56)・(58)・(59)・(79)・(91)・(116)・(122)・(178)・(181)・(188)・(229)・(230)・(238)・(240)・(248)・(302)・(326)・(342)・(344)・(355)・十七(26)・(41)・(48)

以上二十四例。

(2)ヲコト點……二十八例

前田本日本書紀院政期點

十四(45)・(69)・(120)・(125)・(137)・(139)・(162)・(211)・(243)・(249)・(250)・(261)・(290)・(296)・(341)・(351)・(368)・十七(24)・(44)・(46)・(54)・(60)・(103)・(122)・(124)・(125)・(126)・(135)

以上二十八例。

(3)實字訓・漢文注……ナシ

(4)反切・直音注……一例

十四(157)

以上一例。

(5)返點・句讀點・科點……七例

十四(69)・(159)・(206)・(258)・十七(23)・(58)・(94)

以上七例。

(6)合點……一例

十四(32)

以上一例。

iii)兩本に存して互に異るもの……百八十二例

(1)語彙……三十二例

十四(24)・(31)・(67)・(70)・(82)・(109)・(112)・(124)・(167)・(175)・(189)・(193)・(200)・(210)・(252)・(303)・(312)・(316)・(327)・(334)・(347)・(353)・(385)・(386)・(397)・十七(20)・(25)・(45)・(90)・(95)・(119)・(121)

以上三十二例。

(2)待遇表現……二例

十四(28)・(46)

以上二例。

(3)活用……五例

十四(106)・(154)・(221)・(356)・十七(74)

以上五例。

(4)音便……七例

十四(38)・(94)・(187)・(226)・(274)・十七(78)・(123)

以上七例。

(5)假名遣（ヲ―オ）（ヰ―イ）……二例

十四(149)・(356)

以上二例。

(6)誤點……四十九例

十四(2)・(3)・(15)・(29)・(30)・(33)・(42)・(43)・(51)・(60)・(64)・(71)・(72)・(95)・(103)・(107)・(110)・(113)・(123)・(132)・(153)・(161)・(165)・(166)・(192)・(198)・(202)・(217)・(218)・(219)・(220)・(242)・(254)・(295)・(306)・(309)・(310)・(314)・(328)・(339)・(343)・(375)・十七(65)・(67)・(72)・(87)・(91)・(120)・(130)

以上四十九例。

(7)實字訓—片假名、ヲコト點—片假名、萬葉假名—片假名……十八例

十四(40)・(41)・(86)・(145)・(174)・(177)・(185)・(192)・(201)・(301)・(305)・(319)・(324)・(335)・(356)・(374)・(390)・十七(70)

以上十八例。

(8)加點位置（除誤點）……二十五例

十四(5)・(11)・(18)・(25)・(26)・(49)・(96)・(101)・(118)・(152)・(155)・(168)・(169)・(195)・(197)・(201)・(281)・(283)・(336)・十七(1)・(2)・(51)・(75)・(88)・(129)

以上二十五例。

(9)部分附訓……四十二例

十四(1)・(10)・(19)・(21)・(83)・(84)・(85)・(89)・(90)・(121)・(158)・(173)・(180)・(182)・(187)・(198)・(199)・(203)・(216)・(233)・(255)・(256)・(284)・(293)・(308)・(318)・(362)・(370)・(372)・(398)・十七(12)・(14)・(21)・(36)・(65)・(81)・(83)・(86)・(117)・(133)・(134)・(140)

以上四十二例。

〔因みに、i)ii)iii)の總計は五百五十五例となり兩本の異同一覽の五百四十六例を上回るが、これは二つ以上の異同要素を有つ例が若干存するためである〕

以上より明かな如く、近い閑柄にあると言はれてゐる兩本の訓點には、相當量の異同が存する。先づ、i)前田本の

みに存するものが三百十二例も有り、これはii)圖書寮本のみに存するもの六十一例に比して五倍強の多さである。内容を見てみると、(1)片假名訓九十八例も然ることながら、(2)ヲコト點百二十八例、(3)實字訓・漢文注十八例が注目される。(2)ヲコト點百二十八例を分類すると

む……二十七例。に……二十例。の……十七例。と……十三例。を……十一例。こそ……九例。たり……九例。なり……八例。より……六例。て……四例。か……四例。は……三例。といふ……一例。なる……一例。

〔因みに、この合計數は百二十八例より多い。複數のヲコト點を有つ例が若干存するためである〕

の如くである。この中「む」・「と」・「たり」・「なり」・「より」・「といふ」・「なる」は線點・鈎點であり、半數近くを占めてゐる（朱點・墨點ともに存する）。即ち、前田本の線點・鈎點のヲコト點は朱點・墨點共に、圖書寮本に無いものが相當量加點されてゐるのである。從つて兩本の點圖にも若干の異同を生じ、卷第十四の線點「なり」・「たり」・「る」・「より」・鈎點「たり」（左下ノモノ）、卷第十七の線點「る」・「なる」・鈎點「より」（右上ノモノ）・「ぬ」・「といふ」は前田本にのみ存して圖書寮本には加點されてゐないものである。星點の方は、「か」（眞中上ノモノ）・「ぬ」・「とき」及び「（の）」（眞中下ノモノ）のやうな古い點法を殘したかと思はれる特殊なものに至るまで一致してゐる（前のヲコト點圖參照）。また、星點のヲコト點も、前田本のみに存するものが圖書寮本のみに存するものに比して約二倍半有り、やはり多い。この中には(297)「十四365日香ヶ等の語は（「の」前田本ノミ）」の如く、片假名と異る訓法を傳へて待遇表現の違ひにも關はる例も含れてゐる。(3)實字訓・漢文注十八例も目立つ存在である。これ等は何れも辭書的注記であり、日本紀私記・辭書・字書等に依り加點した性質のものであると考へられる。その意味では(4)反切・直音注四例も、用例は稍ゝ少いながら、同樣の事情が考へられる。また、(6)合點

三例と(1)片假名訓九十八例中の十四(47)・(251)の如き合點附きの訓及び十四(74)の如き「養老」注記を有つ訓等とを併せ考へると、異本・日本紀私記・辭書韻書等に依り加點したものの存することが指摘し得るのである。これは(1)片假名訓九十八例の中に、既に一訓有る外に加へた別訓が相當量含まれてゐることにも關聯して行く。また一方、(1)片假名訓九十八例の中には十四(104)・(251)等の如き逐字訓や極めて易しい訓が少からず含まれてゐる傾向も指摘し得る。これらの兩傾向を有つ所の前田本のみに存する訓點を移點年代よりは後世に別に加點したものと見做すことは、加點樣式の一樣性より見て不可能である。

ii)圖書寮本のみに存するもの六十二例については、先づi)前田本にのみ存するもの三百十二例に比して少いことが特徴である。(1)片假名訓二十四例の中、十四(53)・(59)・(229)・(230)・(238)の五例は歌謠等の萬葉假名に加點したものであり、i)の(1)にも十四(50)・(52)・(54)・(111)・(143)・(234)・(235)・(236)・(241)・(257)・十七(6)・(10)・(73)の十三例を數へ、當時萬葉假名に對する加點は、他の訓より氣輕に其場々々でなされた傾向が見られる。(2)ヲコト點二十八例を分類すると、

を……八例。に……八例。の……四例。こそ……四例。て……三例。と……二例。

の如くであり、前田本に於ける線點・鈎點のやうな樣式上の際立つた傾向は見られないが、この中には(69)「十四157勸蠶事(ソトムコカヒノコトヲ)(「を」圖書寮本ノミ)」・(243)「十四326暴虐(アシクサカサマナルワサヲ)(「を」圖書寮本ノミ)」の如く、片假名と異る訓法を傳へて連用修飾のヲ格の有無に關はる注目すべき例も含まれてゐる。

次にiii)兩本に存して互に異るもの百八十二例について述べると、(1)語彙三十二例の中には、十四(31)「オノレ(朕)—ワレ」・(70)「カヒコ(蠶)—コカヒ」・(312)「トホス(穿)—トホル」・(316)「ル(入)—シ」・(327)「マ(夕)(更)

―（サラ）に」・(397)「ツ（殺）―ヌ」・十七（25）「ワタス（絙）―ワタル」・(45)「トヽマリテ（滯）―トヽコホリテ」等の如く明白な例も有るが、若干説明を要する例も少からず含まれてゐる。十四(193)「アカシマニ…（歟…）―アカサマニ…」・(252)「オモホエ（覺）―オホエ」・(303)「マニ〳〵（隨）―マヽニ」・(353)「ユタネ（付）―ユタニ」・十七(20)「マホリ（護）―マモリ」・(119)「ウメナヒ（謝罪）―ウヘナヒ」等は、語史の上で語形の新古に關係し、一見十四(193)・(252)・(303)は前田本の方が古形で(353)は圖書寮本の方が古形であるかの如く見えるが、竝記の加點との關聯もあり、一概には新古を言ひ得ない。十四(109)「アヤ（漢）―アヤヘ」・(210)「タテマツレル（獻）―タテマツル」・(385)「ヒキヰタル（率）―ヒキヰル」・(386)「スヘ（領）―スヘラ」・十七(95)「オコル（興）―オコレル」等は、接辭により異つてゐる。十四(24)「トモニ　イラ（與）―イカニ」・(82)「ホメカタラ（稱）―ホメカタリテ」・(334)「□□ルテ（降陷）―ヤフレテ」等は、部分附訓・訂正により異つてゐる。十四(167)「マセヨ（垂降臨）―マセロ」・(200)「マタラヲ（聰）―ミタラ」・十七(90)「アルカタチ（所見）―ミルカタチ」等は、これ自體興味ある異形であるが、圖書寮本の語形は誤寫に原因して生じたもののやうである。殘る(67)「たり（り）（產）―リ」・(112)「原、―原。」・(124)「舞―舞て」・(189)「人、―人。」・(347)「裏。て（消）―裏て」・十七（121）「とき（先）―に」等は、ヲコト點に關するものである。これ等は、元來同じ點をそれぞれ異る認定をして移點したために異る訓法になつたものと思はれる。

(2)待遇表現二例は、實はかなり曖昧な異同である。十四(28)「か（汝）―の」は、前田本のヲコト點を一應「か」と認定したものの其の加點位置は曖昧で、少し下れば「の」の位置となる。恐らく元來曖昧な位置に加點されてゐたものを、前田本は其のまま曖昧な位置に移點し、圖書寮本は「の」と認定して移點したために生じた異同かと思はれ

る（この箇所、片假名訓では兩本共「イマシカ」とある）。十四(46)「オクリタテマタヒテ（侍送ノ左訓）—オクリタテマタマヒ」は、部分附訓のものを一訓の如く續けて移點したために難解な異訓となつたもので、元來は「オクリタテマタ（シタ）マヒテ」の如きものであつたかと思はれる（此の箇所、右訓では兩本共に「オクリタテマツリタマ」とある）。

(3)活用五例は、十四(106)「ハムヘラス（不在）—ハムヘラサル」・(154)「ユキ（行）—ユク」・(221)「オホシ（念）—オホス」・(356)「三門マキリシ（朝參）—ミカトマイリシ」・十七(74)「スコシキナル（小）—スコシキナリ」である。文脈上十四(154)と十七(74)とは前田本、十四(106)は圖書寮本の方が適當であり、前田本に二活用形を併記してゐる十四(221)は何れにても訓み得、(356)は圖書寮本と共通の方が適當である。

(4)音便七例は、十四(38)「アサムキテ（僞）—アサムイテ」・(94)「フヽミテ（銜）—フヽムテ」・(187)「マサク（言）—マウサ」・(226)「ハヘリ（侍）—ハムヘリ」・(274)「ハムヘラシム（安置）—ハヘラシム」・十七(78)「オホキマツキミ（上臣）—オホイマツキミ」・(123)「カヘリマテネ（歸朝）—カヘリマウテネ」である。十四(274)のみ前田本が音便形を表記し、他は圖書寮本が音便形表記である。

(5)假名遣二例は、十四(149)「ヲサムル（脩）—オサムル」・(356)「マキリ（參）—マイリ」である。何れも前田本が本來の正しい假名遣である。

(6)誤點四十九例は、前田本が誤點である十四(166)・(198)、前田本が加點位置（左訓ヲ次行ノ右訓トスル等）を閒違へて移點した十四(30)・(43)・(64)・(161)・(165)・(310)・(343)、兩本共通の誤點を圖書寮本が重書して訂した十七(65)、前田本が誤つて移點し後に自ら訂正した十四(42)・(60)・(192)・(295)・(375)・十七(120)より外は總て圖書寮本の誤點である。〔こ

れ等の誤點は、元の訓點本で用ゐられてゐた假名字體を推定する上で有力な手懸りとなる。(91)「十七241 身ウセヌ 薨（圖書寮本「身」ヲ「ア（「ミ」ノ誤）」トス）」の例などは、元の訓點本で前田本の如く實字訓ではなく、古體の片假名であつたものの存在を考へさせる材料となる。」

(7)實字訓—片假名・ヲコト點—片假名・萬葉假名—片假名十八例は、前田本がヲコト點の箇所を圖書寮本が片假名としてゐるもの十四(40)・(145)・(174)・(177)・(192)・(301)・(324)、前田本が實字訓の箇所を圖書寮本が片假名としてゐるもの十四(41)・(201)・(305)・(319)・(356)・(390)、逆に前田本が片假名の箇所を圖書寮本が實字訓としてゐるもの十四(319)・(374)・十七(70)、前田本が萬葉假名の箇所を圖書寮本が片假名としてゐるもの十四(86)・(335)、その他前田本が「周防」の箇所を圖書寮本が「周方」としてゐるもの(185)、である。

(8)加點位置（除誤點）二十五例は、前田本の左訓を圖書寮本が右訓としてゐるもの十四(18)・(26)・(49)・(101)・(168)・(169)・(195)・(197)・(201)・(281)・十七(2)、逆に前田本の右訓を圖書寮本が左訓としてゐるもの十四(5)・(11)・(25)・(118)・(152)・(155)・(283)・(336)・十七(1)・(51)・(75)・(129)、前田本の「コロサムトアリケリ」を圖書寮本が「コロサムトナリケリ」としてゐるもの十七(88)、前田本の「　て而」を圖書寮本が「而て」としてゐるもの十四(96)、である。

(9)部分附訓四十二例は、部分附訓に原因して兩本の加點が一致してゐないものであるが訓法としては同じであると見做し得るものである。

3 聲點

聲點も訓點の一部と見做し得るものであるが、一般的に萬葉假名・片假名・ヲコト點の傳來と聲點の傳來とは必ずしも一致せず、一應聲點については此處に別項を立てて檢討する。本文の漢字に附された聲點は兩本共に存するので

あるが、訓點の片假名に附された聲點は多く前田本のみに存し、兩本の相違の一大要素である。以下に兩本の共に存する部分についての聲點の異同の全例を掲げる。〔掲出要領は前に同じ。各用例については前號（本文篇補）を參照。但、本稿は次の追加表に基くものとする〕

○（本文篇補）追加表

㈠本文に附された聲點卷第十四に次の用例を加へる。

7 割墨長田。。　256 墨 大磐。

78 墨 斬。　274 朱 御倉小倉。。。。

163 割朱墨坂。　276 墨 角。

204 墨 身狹。。　281 朱 伯。孫

250 墨 談。　351 墨 高拔原。

250 墨 岡前。　384 墨 菟代。

(一)本文に附された聲點

i)前田本にのみ存するもの

巻第十四

37 墨 蚊屋野

78 墨 斬

150 墨 主嶋

214 朱 筑足流城

260 墨 固

261 墨 百濟王

269 墨 虎

413 墨 東城王

巻第十七

112 朱 與慮忘謎鳴

112 朱 阿利等枳ゝ底

165 墨 安定

231 割墨 上臣

ii)圖書寮本にのみ存するもの〔行數ハ便宜上前田本ニヨル〕

卷第十四

196 墨 海部直

307 墨 博德

313 朱 (伊)ニ

iii)兩本に存して互に異るもの

卷第十四

119 朱 爾—爾

126 割朱 爾—爾

333 墨 眞珠

417 墨 東漢掬直

卷第十七

188 墨 大將

154 朱 野麼—野麻

282 割墨—朱 寐—寐

293 墨—朱 噦鳥人—養鳥人

322朱　矩—矩

341割朱　志—志

435朱　婆—婆

438朱　阿—阿

巻第十七

114朱　以—以

128朱　紆—紆

233墨　伊—伊

276朱　能—能

(二)訓點に附された聲點

(1)萬葉假名實字訓に附された聲點

十四159墨「御惠」・十七203墨「佐官」の全二例は、兩本共一致してゐる。

(2)片假名に附された聲點

片假名に附された聲點の多くは前田本にのみ存するものである。前號（本文篇補）に掲げたものの中、次のi)兩本に存して一致するもの・ii)兩本に存して互に異るものの外は總て前田本のみに存するものである。その外に、iii)圖書寮本のみに存するものが若干有る。

i)兩本に存して一致するもの　〔行末注記中ノ「前本」ハ前田本、「圖本」ハ圖書寮本、「缺」ハ聲點ヲ缺ク意デアル〕

巻第十四

6墨　アソヒタマフ（遊）
34墨　オシハ（押磐）
35墨－朱　ユタネ（付屬）
37左墨－朱　カヤソ（蚊屋野）
38墨－朱　イフク（呼吸）（但、前本「ク」缺）
72墨　サスキノ（假廐）（但、前本「サ」缺）
79左墨－朱　オホムマソヒ（御者）（但、前本「ソヒ」缺）
88墨　キヤヒ（跪禮）（但、圖本「ヤ」ヲ「カ」トス）
90墨　ウタノミトヘノマサキタヽカメ（菟田御戸部眞鋒田高天）（但、前本「キ」ヲ「シ」トス、前本「ウタ」・「マ」缺）
96割墨　シコトヒ（磯特牛）
102墨　ワナキ（經）
109墨　コトタヘ（故）
140左墨　ヨコトシ（萬歳）（但、前本「コ」缺）
148墨　カワラノシマ（各羅嶋）
189左墨　カセサモロフトイフニツケテ（託候風）（但、前本「ロ」缺、「イフニ」朱）
195墨　コトワリ（義）
195墨　タシカナリ（切）
195墨　トコマツ（青松）（但、前本「マツ」缺）
197左墨　ハムヘラス（不在）（但、圖本「ハムヘラサル」）
201墨　クラツクリヘ（鞍部）（但、前本「ヘ」缺）
211墨　ヲトリ（雄者）
214墨　ツクソクロサシ（筑足流城）
219墨　ヲナシ（小梨）（但、前本「ヲ」缺）
220墨　イホリシ（營）

223墨　カクレタルツハモノ（奇兵）
223墨　アケホノ（會明）（但、前本「アケ」缺）
224墨　カチイクサ（歩）
224墨　ムマイクサ（騎）（但、前本「イ」缺）
229左墨　カムニハ（壇所）
236墨　クニ（土）
236墨　ヨヲ（葉）
239墨　サシ（城）
240墨　サリ（飛）
242墨　御言ノリ（勅）
245墨　アヒタスケ（推穀）
248墨　アタノ（敵）
254墨　ユキ（赴）
254墨　アタノナカ（敵）（但、圖本「アタノ」缺）
256墨　ミウセヌ（薨）

257墨　コロタチヌ（専用威命）（但、前本「コロ」缺）
258左墨　ソネム（怨）
264左墨　シツクラムテ（後橋）
265左墨　カハ（流）
269墨　ヤモ（八維）
269左墨　コトムク（折衝）
270左墨　ハフリ（視葬）
270墨　ツカサ（者）
273墨　カラヤツコ（韓奴）
282墨　モコヨカ（渡畧）
282墨　アカサマ（歟）
283左墨　カキ（相）（但、圖本284竝ノ右訓）
284墨　クチヲ（轡）
284左墨　コエノヒテキヌケタユルチリ（超攄絶於埃

塵）

285左墨　ハシリサイタツトキカタチホルモカ（驅鶩逆於滅沒）

298墨　ナノリ（稱）

299墨　サカチ（壇呼）

299墨　ヤカタ（屋形）

300墨　キサミ（黥）

302墨　ウチツミオケル（積）

303墨　コトワリ（道理）

304墨　キミ（主）

307墨　ツカハス（出使）

325墨　アヤ（文）

336左墨　アヒタクミ（同伴巧者）（但、圖本「クミ」缺）

344墨　アヤハトリ（漢織）（但、圖本「トリ」缺）

344墨　クレハトリ（吳織）

353墨　モロヒト（衆）

355墨　イサチ（啼泣）

358墨　イサチラル（哀泣）

360左墨　ナクハラシメソ（莫預）

363左墨　ヨサシタマフ（封）

363墨　カツキ（負）

363墨　ヲネノオミ（小根使主）

366墨　カソ（父）

367墨　トラヘ（收）

372左墨　ミツキ（調）

378墨　ミケツ（モノ）（御膳）

379墨　クササ（來狹々）

382墨　アサヒ（朝日）

383墨　タヽ（カフ）（戰）

383墨　アヲハカ（青墓）
386墨　タケハシメ（叱）
399墨　ムマハリ（蔓生）（但、前本「リ」缺）
399左墨　イハレス（不可）（但、前本「ス」缺）
402墨　コムナリ（久麻那利）（但、圖本「コム」缺）
407墨　ツヽカハヒト（管川人）
407墨　ミツノ（瑞）

410墨　ミウセ（薨）
421墨　サトリ（智力）
426墨　サカシマニ（悖惡）
430左墨　カキヘ（民部）
430左墨　シナ（地）
434墨－朱　アタナフ（侵寇）

巻第十七

266墨　ヘコホリ（背評）

右の外に、元來は兩本に共に存しながら前田本の其の箇所が缺損したために現在では圖書寮本にのみ存するものが若干有り、右に準じて考へるべきものと見做されるので、次に掲げておく〔行數ハ便宜上前田本ニヨル〕。

巻第十四

4左墨　タケクマシマス（伉健）
11左朱　シセマツリ（殺）
70左墨　タムク（婬）

115左墨　アキツ（蜻蛉）
349墨　アヒタケ（共食）
382墨　マチ（逆）
401割墨　ヤフレテ（降陷）

ii)兩本に存して互に異るもの〔行末注記中ノ「前本」ハ前田本、「圖本」ハ圖書寮本、「缺」ハ聲點ヲ缺ク意デアル〕

巻第十四

4墨　ハ—ハ　イハメリ（滿）
11墨　ミ—ミ　ミネマセル（睡）
34墨　ム—ム　イムサキ（曾）
38墨—朱　ラ—ラ　シモトハラ（弱木株）（但、前本「シ」缺）
43墨—朱　コ—コ　コイマロヒ（反側）（但、前本「イマ」缺）
48墨—朱　ラ—ラ　ハセノアサクラ（泊瀨朝倉）（但、前本「サク」缺）
49墨　ヤ—ヤ　モルヤ（室屋）
77墨—朱　フ—フ　カソフ（展）
132左墨　リ—リ　オムリ（失色）
150墨　ニリ—ニリ　ニリムセマ（主嶋）（但、前本「ム」缺）
150左墨　ム—ム　ネリムセマ（主嶋）
165墨　セ—セ　ミセ（示）
185墨　ミ—ミ　御言ノリノフミ（勅書）
195左墨　キ—キ　マタキコロ（節）
197墨　タ—タ　ヒタカ（日鷹）
200墨　キ—キ　イマキ（新）
205墨　ク—ク　ミクラキ（位）
205墨　キ—キ　ミツキ（苞苴）
206墨　ミ—ミ　ミコロ（心）
215墨　ニ—ニ　クニ（地）
217左墨　ハ—ハ　ハナハタ（大）（但、前本「ハナ」缺）
218墨　チ—チ　ヤマトノミコトモチノイクサノ

221墨　コ—コ　キミタチニ（日本府行軍元帥等）（但、前本「イ」缺）

222墨　ミ—ミ　ノリコト（令）（但、前本「ト」缺）

222墨　ル—ル　シタツミチ（地道）（但、前本「シタツ」缺）

226左墨　シ—シ　ニクルマ（輜車）

232墨　ニ—ニ　モマレナマシ（所乘）

242墨　ル—ル　カ—カ　クニアカタノウチ（國郡縣）

247左墨　ク—ク　ミマカリタル（命過）

251墨　メ—メ　トクノチ（喙地）

254墨　ラ—ラ　キハメタ、カヒ（力鬪）

262墨　ケ—ケ　イケラム（全）

264墨　オトロキモトカヘリテ—オトロキモトカヘリテ（愕然反視）

274墨　ユ—ユ　イサ、ケキ（小）

281墨　コ—コ　ムユ（六口）

284墨　ラ—ラ　ヨロコヒ（賀）

298墨　ケ—ケ　ミタラヲ（驄）

301墨　ヘノ—ヘノ　ニケマウケル（逃化來）

303墨　マシ—マシ　ツカヘノヨホロ（直丁）

311墨—朱　ム—ム　アシクマシマス（惡行）（但、前本「ヨホ」缺）

326墨　シ—シ　ホシ—ホス　コロサムトオホシ（ス）（自念將刑）（但、前本「シ」缺）

334墨　マ—マ　サ—サ　アシクサカサマナルワサス（暴虐）

スマヒ（相撲）（但、前本「コ」缺）

345墨　エ—エ　スミノエ（住吉）

349左墨　ヘ—ヘ　ム—ム　アヘタマハム（欲設）
（但、前本「ハ」缺）

360左墨　コ—コ　ヤ—ヤ　ツ、キ—ツ、キ
ウミノコノヤソツ、キニ（子ニ孫ニ八十聰綿）

362墨　ハ—ハ　ヲ—ヲ　ナカバヲハ（一分）（但、前本「ナ」缺）

369墨　チ—チ　アカチ（分散）（但、圖本「カ」缺）

380墨　シ—シ　ワタクシノカキヘ（私民部）
（但、前本「ノ」缺、圖本「ヘ」缺）

388墨　ス—ス　サシカクス（翳）

390左墨　マ—マ　オフモトマチ（キミ）（侍臣）

401割左墨　サシ—サシ　コキシノサシ（王城）
（但、前本「コキシ」缺）

401割墨　□オルクセシ□ム—コオル□クセシム（大后王子）

404墨　ノ—ノ　スメラミコトノミタマノフユ
（實賴於天皇）

404割墨　ロ—ロ　アロシ（下）

409墨　コ—コ　ニ—ニ　トコヨノクニ（蓬萊山）

418墨　シ—シ　トホシ（萬里）

418左墨　（缺）—ヨ　ナマウテキシ—（缺）　ヨモノヒナマウテキシタカフ（四夷賓服）

422墨　シ—シ　レ—レ　ヤマヒシアツシレテ
（遘疾彌留）

427墨　ノ—ノ　コノカミオトヒト（友于）

430左墨　ニ—ニ　ミ—ミ　マウケノキミニアタリテヒトヲメクミオヤニシタカフミチ（居儲

君上嗣仁孝）（但、圖本「ヒト」・「カフミチ」缺）

434墨—朱　スヘヲサメタマフ—スヘラヲサメタマフ（領制）

435左墨　ト—ト　ミト（水門）

iii）圖書寮本のみに存するもの

卷第十四

9左朱　マヨワケノオホキミ（眉輪王）

38朱　カヤノ（株—37蚊屋野ノ左訓ノ誤）

440墨　ケ—ケ　ウラカケノミト（浦挂水門）（但、圖本「ウラ」缺）

卷第十七

170墨—朱　ミ—ミ　アフミノケナノ（近江毛野）

216墨　カカレルハタシノヒノ（綴流）

369墨　ユタニス（委）

423左墨　ミヤコヒナ（朝野）

㈠本文に附された聲點については、同じ語に對する聲點が動搖してゐるに比して兩本の間の異同は少いと言ひ得る。

iii）兩本に存して互に異るものでは、去聲と平聲輕とのやうに不安定な調値に基く外に、歌謠では別の要素も原因してゐるやうである。

㈡訓點に附された聲點については、圖書寮本に去聲點の用例が無く（ii）兩本に存して互に異るものの中に

十四360左墨　ヤソ—ヤソ（八十）

の如き例を見、前田本で去聲點の有る他の箇所では圖書寮本に聲點を缺く等）、平聲輕點についても

十四264墨　カヘリ—カヘリ（反）
311墨　コロサム—コロサム（將刑）
326墨　アシク—アシク（暴）
369墨　アカチ—アカチ（分散）
418墨　トホシ—トホシ（萬里）
422墨　ヤマヒシ—ヤマヒシ（遘疾）
165墨　ミセ—ミセ（示）
195左墨　マタキ—マタキ（節）

の如く前田本と異り、前田本との間に質的な差異が認められる。但、前に二、加點樣式で述べた接頭語「み」に聲點を附した前田本の全二十八例中、「ミ」に對する二例の例外的箇所を圖書寮本で

十四206墨　ミ—ミ　ミコヽロ（心）
十四11墨　ミ—ミ　ミネマセル（睡）

の如く訂し得る等、併せ見るべきものである。

四、むすび

以上を要するに

○前田本の訓點は、本文の書寫よりは後れて加點されたものである。
○前田本と圖書寮本との訓點は近い閑柄にあるが、後者が前者を全く其のまゝに受繼いだものではない。
○前田本の假名字體の中には古體字も交つてゐるが、圖書寮本の移點された永治二年頃以降の新しい字體を含んでゐる。
○前田本のヲコト點圖の線點・鈎點（朱墨共）には、圖書寮本に無いものも相當量用ゐられてゐる。
○前田本の訓點の中には、圖書寮本に無い辭書的訓を含んでゐる。
○訓點に附された聲點は、前田本のみに存するものが多い。
○前田本の訓點に附された聲點は、平（低イ）・上（高イ）・去（上ル）・平輕（下ル）といふ四つの調値把握に基いて加點されたもので、本文に附された聲點より信頼の置けるものである。
○前田本の加點年代は、以上のことを綜合して考へると、圖書寮本の移點された永治二年頃よりは遲れる院政後期と見るのが妥當である（但、前田本の訓點は圖書寮本の訓點より古い要素を有つ）。

以　上

附記
本稿を成すに当り、太田晶次郎先生・飯田端穂氏を始めとする前田育徳会尊経閣文庫、及、川瀬一馬博士に多大の御便宜を御取り計らひいただいたことは前々号、及、前号同様であり、謝意を捧げ奉る。尚、本稿も文部省科学研究費補助金を交附された『日本書紀古訓の研究』の成果の一部である。また校正には北海道大学大学院学生永田信也氏・漆崎正人氏を煩はせ、札幌室谷印刷には引続き困難を極める組版に御協力いただいたことを併せて記し、謝意を表す。